

1996年における東芝技術の成果

1996年技術成果号の発行にあたって

常務取締役

笠見 昭信



私どもエレクトロニクスとエネルギー産業を取り巻く市場環境はダイナミックに変化しており、大きな変革への流れとなってきました。第一の流れは、情報のデジタル化とインターネット、移動通信などの通信インフラの急速な進展により、新しいビジネスチャンスが広がっていることです。情報のデジタル化により各種の情報サービスが融合してくると同時に、パソコン、電話、テレビなどの情報・映像機器も互いに影響し合い、新しいサービスとそれに向けた新機能の情報機器が求められてきています。特筆すべきは、新しい市場創造と先端技術開発がスパイラルな相互作用をもちながらスピード感をもって展開しているということです。

このような新規事業分野をリードするため1994年7月に発足させたAdvanced-I事業本部の横断的な活動を中心に、この分野でいくつかの成果が生まれてきました。昨年11月のDVDプレーヤの発売はその代表例であり、今後ソフトを充実させるとともに、新たな市場を形成するDVD-ROM、DVD-RAMおよびこれを搭載した機器やサービスを提供していきます。また、昨年9月にはネットワークコンピューティングを推進する新しい組織を設立しました。当社の得意とするモバイルコンピューティングを活用したインターネット、イントラネットの進展を先取りしたネットワークコンピューティングビジネスを推進していきます。

エネルギー分野においても、グローバルな視野での環境との調和が強く求められています。今後進展するネットワーク社会においてもエネルギーの安定確保は最重要課題であり、これがアジアの発展をも大きく左右します。私どもは、材料・デバイス、情報通信を含めた総合力の発揮によりこの課題に取り組んでいきたいと考えています。

技術開発のもう一つの流れは、ボーダレス化の大きなうねりの中で、すべての技術を自社で賄うのではなく、コア技術をより強くして、それを中核に世界の有力企業とアライアンスを組み、世界市場で勝ち抜いていく時代になりつつあることです。研究開発段階でもグローバルなR&Dアライアンスが自社の技術競争力をより強くするうえで重要な要素となってきました。私どもも、IBM、シーメンス両社との64M、256M DRAMの共同開発により、新技術の構築はもとより異なったカルチャーの交わりにより多くの大切なものを体得することができました。このような共同研究の成果をベースに、米国バージニア州にIBM社との合弁によるDRAM量産の新会社を設立しました。もう一つの成長事業でありますパソコンにおいても、マイクロソフト社、インテル社との開発段階からの連携が大きな力となっています。

以上、ダイナミックに変化する市場に対応する当社の技術開発の方向について概要を示しました。1996年の具体的な技術成果は本文をご一読いただきたいと思います。革新的技術としてATM網にも対応できる次世代高速ルータ“セルスイッチルータ”、CMOS構造での高感度・低ノイズのイメージセンサなど、新しいコンセプトによる成果を特にご紹介します。

また、今年3月初めには当社が皆様に提案する200X年の姿を示す“TOMORROW21 東芝技術展”を開催させていただきました。この技術成果号と合わせ、皆様のご助言、ご指導をいただきたくお願い申し上げます。